

## 『空華』 中西正博



令和2年7月 柘書房刊

出版記念会があれば、選者の桑原正紀様、批評紹介者の中津川勲坐様ら皆様にお会いし直接お礼を言い、お話しをしたかったのにコロナで叶わず残念でした。

私が短歌を始めた頃、支部歌会のある流れでよく飲み屋に行ったが、ある時そこで「私にとって短歌とは何か」が話題となった。若い友は「――ぎゅっと握りしめてしたたるエキスが短歌」と言った。さすが詩人だと感じた。私はと言うと「日記かなあ」とぼそつと言った。そして今だったらと考えて、やはり同じことを言いそうだ。日常の日記は項目の羅列だけになっていて、そのときの感情や気分が短歌になっていくのかもと思う。

たとえば、日記や記録でもよりよい形で残しておきたいので、推敲もし歌会にも出る。それでよりよいものに基づく過程で生きる充足感を得ているように思う。

第一歌集「遙かなるアイデア」は定年までの二十年間の生の日記・記録、そのあと、いもかけず、三十年も生きたので第二歌集「空華」が出来たと言える。ありがたい。

## ——歌集の著者から——

## 『シーサイドライン』 佐藤静子



令和2年7月 柘書房刊

人は長い人生の中で、大いなる喜びと大いなる悲しみが無いまぜにやってくる怒濤のごとき一年に、一生一度は遭遇するものである。令和二年は、私にとってそういう年であった。新型コロナウイルスという得体の知れない疫病が流行りはじめ、人々は様々な制約に窮屈な思いをしはじめていたが、私はあまり気にならなかった。第一歌集を作るべく没頭していたからである。

田宮朋子氏の選を得て完成したのは七月半ば。私は喜びと安堵で一杯であった。ようやく落ち着いた秋になり、夫が十月末に滋賀県にテニスの試合に行くことになって、私も同行することにした。二人で琵琶湖周遊するのを楽しみにしていた。ところがその二週間前に夫が急逝したのである。亡くなる寸前までテニスをやりに、お酒を楽しんでいた。私は現実を受けとめられず、心は宙をさまよったまま年が暮れた。令和二年は歌集『シーサイドライン』の上梓と夫の死という二つの大きな出来事があった、忘れることのできない年となった。

## 『花の未来図』 大西晶子



令和2年8月 柘書房刊

私の第一歌集『花の未来図』の発行日は二〇二〇年八月十日だ。前年十月に古希を迎えた記念に、出版したいと思い準備を始めたのだった。短歌を学び始めて三十八年が過ぎていた。それまで歌集を出せなかったのは歌が下手で人様に読んで頂くのが恥ずかしいと思っていたからだ。恐るおそるという気持ちで出版したが、思いがけず発行後にたくさんの方から感想を頂き有難く読ませて頂いた。また私の歌の傾向について批評を下された方もあり、初めて自分の歌が見えたような気もした。選歌の過程で高野公彦氏が直して下さった部分は貴重な勉強になった。歌集を出したことで学んだことはとても多い。もっと早く勇気を出して歌集を出してみれば良かったと思う。また、短歌関係の活動で留守にしたりすることを家族に申し訳なく思っていたが、歌集の出版を喜んで祝ってもらえたのも嬉しかった。

一度歌集を出版したからというわけではないが、以前よりも自由に歌が詠めるようになったように思う。

## ——歌集の著者から——

## 『青曼珠沙華』 水上比呂美



令和2年9月 柘書房刊

『青曼珠沙華』は私の第三歌集です。この歌集のおかげで嬉しいできごとが三つありました。

一つ目は、推敲のとき高野先生が電話でアドバイスをくださったことです。ちょうど新型コロナウイルスが流行り出した令和二年の春の外出自粛のころでした。

二つ目は、柘書房が表紙のデザインを依頼している日本ハイコムのデザイナーさんから表紙のデザイン画に、『青曼珠沙華』のレイアウトを送ります。いい歌ばかりでした。涙が出そうになりました。A案は(略)、B案は一輪の青い彼岸花へのメッセージ、そしていつかさばに立つ影のイメージ。よろしくご検討くださいませ」というメモが添えられていたことです。歌を全部読んで、素敵な表紙にしてくださいと感激しました。

三つ目は、片柳草生様が歌集のあとがきの、宮英子様の曼珠沙華の歌への憧れもあります、という私の文章に気づかれてお手紙をくださったことです。

多くのかたがたに感謝の気持ちでいっぱいです。